

三十九号

江戸花三升曾我一

第二番目

由井之富士

紺屋之段

一	板屋勘兵衛	中村此藏
一	下男惣助	市川升藏
一	比企藤内	松本大七
一	いちこお升	市川升五郎
一	丁字屋吉兵へ	中島三甫藏
一	研屋お勘ばゝア	中島勘左衛門

一	奴浪平	実ハマリかせ
一	秋夜家来増岡歩蔵	坂東又太郎
一	梅や洩の由兵衛	沢村宗十郎
一	次郎作娘小よし	岩井半四郎
一	紺屋次郎作	市川団蔵
一	次郎作忤勝助	市川団十郎

本ぶたい三間の間 紺屋の道ぐ立 正めん押入 納戸口に 壁に帳面注文色々取付有り 見こみ 能所に愛染明王の掛地をかけ灯明供物せん香 打鋪大相に飾雀棹に染物 色々かけて有り まくの内より団蔵 親仁のこしらへにて丈ヶ之短き 単羽折を着て愛染を飾て居る 半四郎 やつし着流しの形ニ而 前だれをかけてぜんわんを掛て居る 升蔵やつし 若イ物の形ニ而 俎板庖丁を持て 大こんにんじんを切て居る てんつゝにてまくあく

升蔵

一 申／＼小よし様●の支度は三十四五人前に致し

升たがよふムリ升かへ

半四郎

一 なんぼでもよい程二見つくろふて拵へたがよいわいの

升

一 いへ／＼それでムリ升ぬ 廿六夜は紺屋の日待の名代 思ひの外二人の
ふへる物でムリ升ルて

半

一 そのよふ二思やるなら一寸とゞ様二聞て見よふわいの

升

左様がよふムリ升る お聞被成て御ろふじ升せ

半

一 もし／＼とゞ様へ今夜は五月の廿六夜 定而御客もムんせふナ

団藏

一 有共／＼ まつなが家の衆よ それ二紺屋のおかんばゝアどの 丁子屋
の吉兵衛殿 板屋の勘兵衛殿 そして何ニよ 夫／＼アノ蒲原の梅屋渋の由
兵衛も見へるで有ふぞや

半

一 もし／＼そんならアノ 今宵の日待ニ由兵衛様もムんすかいの

団

一 紺屋商売に梅や渋は付もの 毎日／＼心易ふ出入する半兵衛老年に三度
の日待じやに依而おじやれと人を遣たわいの

半

一 ソリヤよふお心がつき升てムんすなア ムんすお方も皆身祝ひ 賑な程
よい事はムんせぬわいなア

升

一 小よし様ニした事がアノ由兵衛様の咄さへ出ると何だかしらぬがうき／
＼と アノうれしそふなかほわいの

半

一 又わるい事いやるはいの とゞ様も聞てじやわいの

一 団

一 これ／＼惣助アノ由兵衛がどふしたのじや

升

一 お聞被成ませ 梅や渋の由兵衛殿は以前はかまくらでのれき／＼でしか
も正木次友といふ人の娘に小梅殿とやら

申升 言名付の縁ぐみ迄有るといふ様な咄もムリ升たが 人の身の上と申升
物は しれぬものではムリ升ぬか

一 団 ソリヤ聞た様な名じや 正木次友といふ娘の小梅といふ言名付の女房が
由兵衛には有るといふはなしか

一 升 なんだかみんなが其様な嘶を帳場で申て居り升ル

一 団 わかい物といふ物は色々な噂をするものじや

一 半 そんならアノ由兵衛様には小梅様といふ言なづけの御内儀様が有るかい

一 升 の とふやらそんな事でムリ升た

一 半 ひよんな事聞たわいの

一 団 何のいらざる由兵衛の内儀の嘶 そなたのかまふことはないわいの

一 半 じやといふても

一 団 またかいやい

一 半 ヲ、しんき

一 升 其しん気で思ひ出した簇へしんしの張ものを取込ふか

一 団 こりや／＼小よしそこらをちつと片付や半

一 半 アイ／＼

ト てんつゝに成り 升蔵染物を取込 団蔵料り拵へをする 半四郎
方／＼片付ている 花道より三甫蔵は やつし単羽折を着て 扇
子を持出てくる 跡より勘左衛門 やつしばゝアの形りに而 杖を
突 数珠を持出て来る 跡より此蔵 やつし単羽折の形りに而 扇
子を持出て来る 跡より升五郎いちこの形り前帯

雪駄を履 つゝらかさを持て出てくる

三甫

一 何といつれもアノ紺屋の次郎作殿ハいつも不替廿六夜の月待を致さるゝとはきどくな事ではムらぬか たしか正月の廿六夜にも此様につれ立て被呼て行たてはムらぬか

勘

一 本二こなさまハよふ覺へてムリ升ル

三

一 覺へている筈でムル ひつぺかして式万と三本取られたによつてそれで覺へて居升わいの

勘

一 ハゝゝゝたしか夫々長吉殿と板勘殿とを誘ひ合てわしも被呼て行升たわいの 誘ふといへハ勘兵衛殿 此女中ハどれからつれてムつたのじやせい

此

一 聞て被下まし。此女中は相模から見へたいちこ殿さ 今夜わしが廿六夜の日待へつれてゆくのは ちつとおもしろいしゆこふがこんすで

三

一 是／＼勘兵衛殿 思ひ付こそ有ふに日待のばんにいちことはついぞ今迄聞た事がムんせん

此

一 サアその今迄ない所が此勘兵衛の点取細工は流／＼仕へし／＼かふを見さつしやりませ

升五郎

一 もし／＼勘兵衛様わたしはどれへ参りますルへ

此

一 貴様はわしがつれて行所がこんす程に マア／＼わしと其所二こつちへござんせ

三

一 そんなら勘兵衛殿 婆様先へ立て行升ぞや

此勘

一 サア／＼ムりませ

ト 又てんつゝ二成り 皆々ぶたいへ来る

三 次郎作殿 今日は不相替忝ふムル

一 団 これは／＼よふムり升たの

一 勘 時分使は請ねとも皆つれて来升たわいの

一 団 よふこそ／＼マア／＼奥へとをらつしやい／＼

一 此 そんならゆるさつしやい

一 団 サア／＼何の挨拶に及ぶ事が有る物か サア／＼あれ／＼

一 皆々 左様なら御免ん被成い

ト 三甫蔵勘左衛門此蔵升五郎いづれも上の方へとをる 升蔵たばこ
ぼんを取て行 半四郎茶だいに茶を汲んではこぶ

半 一 どなたもよふお出なされ升た

一 皆々 是ハ／＼御構なさんな

一 一 こちの内の日待ハこなさん立もしつてのとをり正五九月此五月の廿六夜
は頼朝様御狩の内は近在近郷おふ火を焚事もならず 人寄をする事もならず
敵敷言付よふ／＼ きのうかまくらへ御帰被成たニよつて川留メの明たよふ
ニ やれ村の正月だの日待だのと てんでの思ひ／＼にこちの内ばかりは相
替らぬ茶めしに逗腐汁むまふもあるまいなれど ゆるりと今夜ハ皆漸さつし
やい

三甫

一 是ハ／＼忝ない 頼朝様も久しいなりで 此五月の不二の御狩待御逗留
の内といふものは原吉はらの間ハ勿論の事 蒲原宿や此由井の当り迄のやか
ましきといふものは 人足に出るやら内を借りられるやら イヤハヤとんだ
事でムた

此 一 飛んだ事といへば アノ廿八日の晩には さて／＼とんだ事が有つたそふにゐるの

勘 一 夫／＼祐経様の狩屋とやらへ 曾我の十郎祐成殿とやらと五郎時宗殿とやらいふ 兄弟の衆かしのびこんで 親御の敵の祐経様を被打たとの事 さて／＼きつい人立ではゐらぬかいの

三 一 左様／＼ きけば十八年とやら その祐つね様をねらつたとのことでムつた なんとよくしんぼふをされたではゐらぬか

升蔵

一 左様／＼ 毎年／＼しば居で狂言にも祐つねを討たい 親のかたきの工藤左衛門とねらつて斗り居るとは 聞升たが 今年といふ今年 曾我兄弟の衆か 其祐つね様を被討たとは さて／＼めづらしい年も有るものではゐらぬか

勘 一 其様な嘶を聞ば本にめづらしいことでムルわいの 夫／＼めづらしいといへば 町人にはめづらしい爰の内の惣領子の勝助殿 染ものに精が出升か

の 一 半 一 アイ／＼此ころは商売の事をいかふ 精出してゝムリ升るわいの

団 一 ヤイ／＼小よしいつ アノのらめが商売の染物に精出した事か有る け

ふも漸々のことて 帳場へうせおつたが 仕こと仕廻てもまだ帰りおらぬ 大方又役にも立ぬ いやいやはらて 若イものを相手にして又稽古してかなうせおろふ かへりおつたらどふしてくりようぞ

半 一 もふ／＼とゝ様その様ニ兄様の事をいわしやんせぬがよふムんすわいな

ア

一 団　　がみ／＼いふてきへ　のらこきおるアノ兄の勝助　うつちやつて置いて見
い　　どの様なわるい物になりおるまい物でもなひ　どうふしてくりやうぞ／
半　　もふ／＼けふは廿六夜の目でたい日待てはムんせぬかいな　マア／＼よ
一 団　　ふムんすわいなア
一　　兄めがのらには氣もせい根ンもたまるものではなひ

トたばこほんをおし立たばこのむ

勘　　一　次郎作殿其様ニいわつしやれ共　アノ勝助殿はせうじんの譬に言ふ鳶が
鷹　　こな様のむす子様には本ニ似合ぬ生れ付　武士にしても適なる人柄　あ
れは紺屋の息子ではない侍じや　町人は似合ぬ　侍が能ひと壱人リ云は　二
人三人　つい侍／＼と異名ニ成て　たれ言ふ共なしに侍勝助と迄言れる程な
勝助殿　大既なことなら捨ておいたがよふムルわイの

団　　一　是／＼何をいわつしやるぞいの　此次郎作は吉岡流の一手も覺て兼房と
迄いわれたれ共町人のやくニ立ぬ劍術第一に　川達は川で果るとやつぱり紺
屋は紺屋で家業をするがよふごんすわいの

勘　　一　サア夫はそふなれ共　此頃の咄を聞ばどことやらの町人が正木次友とい
ふれつとした侍を切殺たとの方々のはなし　何ときつい町人もあれば有る物
てムらぬかいの

三甫

一　成るほどわしもそんな咄を聞升た　慥にそれもかまぐらの

乱橋とやらで侍を殺て立のいた人殺は町人だといふ咄　どこのしかはしらないが　切た町人よりきられた侍が気のどくなことじやアムらぬか

団

一　其様な咄を聞に付ても　アノ勝助めどふいふことでかへらぬぞ　是ゝ早張へハリ／＼場へ行てよんでこひ／＼

升

ハイ／＼かしこまり升た

半

一　アゝ是ゝまちや／＼　我身は勝手のこと働たも　わしが早一ト走り兄様を早ふムんせと言ふて　連立て来よふわいの

升

一　そんなら小よし様　お前が勝助様の御迎ひニムリ升るか

半

一　その内そなたは何やかや拵へてたもや

升

一　がつてんでムリ升ル

半

一　早ふ兄様はかへらしやんせいでなア

ト　てんつゝに成り　花道より宗十郎　胸前○浅黄頭巾やつし股引の
なり　草鞋を履　両かけの洪の荷桶を担て出て来る　半四郎草履を
履　向ふへ行ふとする　花道のまん中にて

ヤアお前ハ由兵衛様じやムんせぬか

宗

一　小よし殿てムリ升か

半

一　もし／＼お前をさつきにから待て居たわいなア

宗

一　サアわしも得意を廻る内　ずいぶん早ふ内方へ参ふと思ふても　頼朝様の御狩の内は商ひもならず廿日計りどこの紺屋へも遣り升ぬ　けふは此梅屋洪を町屋の

鍵やへ八升 中村の桔梗やへ五升 多星やへ三升 いづゝ屋へ七升と さて
／＼けふ聞ヶ敷ふりましたわいの

半 一 其様ニ 得意の多ひ梅屋渋の由兵衛様 それそふおふに色事の廻り所も
おふかるふわいの

宗 一 是は迷惑千万な 紺そめにも柿染にも下染にもなる梅屋渋 色ことのお
さきにつかわるゝとは 我らか商売てこんす その様なおもしろふもないこ
と聞ふより さらば日は高し 裏町の方へ参ふか

ト 行ふとする 半四郎 荷桶のなわを引ばつて

半 一 是イなア こちの内は廿六夜の日待でムんすほどに早よつたがよふムん
すわいなア

宗 一 いへ／＼心にもなひことをいわれては こちの気がすまんでこんす さ
らは得意を廻ふか

半 一 またかいなア とゝ様も待てじや程に マア／＼こちへムんせいなア

ト むりに引ばる

宗 一 アゝ是／＼ 其様に引ばつてはあぶのふこんす／＼

半 一 あふのう思はんすなら ちやつとこちへムんせいなア

宗 一 是ハ めいわく千万な

ト てんつゝに成り 半四郎 宗十郎 ぶたいへ来る

半 一 もし／＼とゝ様へ よし兵衛様がムんしたわいな

団 一 やれ／＼由兵衛殿か サア／＼こちへは入らつしやい／＼

宗 一 ハイ／＼是はどなたも御免ん被成ませい さて／＼此間は

頼朝様のすそのゝ御狩でさぞ御氣つまりてムリ升たてムリ升ふ 私も漸く
今日から商いニ出ますでムリ升ル

団

一 そふでこんせうく

三

一 こな様が蒲原宿の梅屋洪の由兵衛殿でムルか よい所であひ升た わしや
ア丁吉といふ馬道具屋でこんす 近付に成り升ふか

宗

一 是はく能ひ所でおめにかゝり升た 爰の内の次郎作殿にも勝助殿にも
殊の外世話ニ致し被●呉升ル 梅屋洪の由兵衛お心安ふお頼み申升ル

三

一 おたがいく

此

一 幸ひな所でこんした 爰の内方じやア次郎作殿や

勝助殿より 別而おむすの小よし殿とは心易い挨拶そふな 此板勘も知人ニ
成り升ふか

宗

一 是はくよい所で御目にかゝり升た 此上共ニお頼ミ申升 時に早速承
り升ふは 丁吉殿とはちいさい時分の名をやはり今でも付てムリ升かへ

三

一 何さ わしか元の名は丁字屋吉兵衛と言升たがつい丁字屋の吉兵衛を丁
吉くと所て洒落て 丁吉ニしたのでこんす

宗

一 そんなら丁字屋の吉兵衛を所て丁吉と洒落て申ので
ムリ升るか

三

一 さよふく

宗

一 いかさま其様なことは世間ニよく有るものでムリ升
此

一 それにめいわくなは板屋の勘兵衛さ 丁字屋の吉兵衛を

丁吉といふ様に板勘兵衛／＼と洒落て言れるには気がないじやアこんせぬか
宗
一 成ほと板勘兵衛とは氣のないお名でムリ升ル これはしたり何やらわす
れたように有たそれ／＼

ト梅屋洪の荷桶に提て來たる陶を持て來て

もし／＼次郎作殿 是、此陶の酒は玉川といふ名酒 少し計りでムリ升ルが
お前の寢酒にさつしやりませ 江戸土産に貰ひ升たニよつてお前にしんぜ升
ふとわざ／＼持て参り升た

ト陶を団藏がまへにおく

団
一 是は／＼きどく千万な どれ／＼成程とくりからしてどふやら名酒らし
う見へるわいの 此玉川の名酒を寢酒にせいとは忝ない／＼ 是々小よし由
兵衛どのゝ心ざしじや こぼさぬよふに先々アノ愛染様の札のそばへでも遣
て置てたも 早ふ／＼

半
一 アイ／＼とゝ様へ此様な事に迄よふ氣のつかんす由兵衛様 たんと礼を
いわしやんしたがよふムんすぞへ

団
一 成程／＼それには今宵の日待 茶飯成と焚てしへママゝいねばならぬ程に
早ふ草鞋でも解てお客に成たかよいわいの

宗
一 是は／＼忝ふムリ升ル

半
一 是イなア 由兵衛様とゝ様もあのよふニいふでじや程ニ 今宵はゆるり
と咄て居たがよふムすぞへ

団
一 夫々老年に三度の日待じや ゆるりと遊で行たがよいわいの

一 半 それいなア 成ふことなら 今宵は泊てムんせいなア

一 団 それ／＼

一 半 とて物ことに 今宵も翌の晩もあさつての晩も泊て嘶てムんせいなア

一 団 ソリヤ又なんぞ

一 半 壺年に三度の日まちじやわいな

一 団 あほふいへ

一 半 ものは祝ひがらじやわいな

一 団 いろ／＼な事いふわいの

一 半 早ふ日がくれいてな

一 団 あきれるはへ

一 升 蔵 もし／＼時に親方へそろ／＼夜喰を出し升てもよふムリ升ふかな

一 団 成程／＼夜の短ひ時分じや程に早ふ片付て仕廻やいの

一 升 蔵 ハイ／＼板勘様定而夜喰過には何ぞおもしろい御しゆこふがムリ升ふな

一 此 サア此正月の日待には さみせんを弾く盲女をつれて来たによつて 今

一 夜はちつと氣をかへて 口寄せ殿をつれて来たが 夜喰が過たら何とたのし

一 まふじやアないか

一 升 蔵 もし／＼何ぼたのしもふといわつしやり升ても あれ／＼あの様にかさ

一 此 がふせてムリ升ルぞへ

一 一 おきやアがれ せつきやうを聞く心で口をよせてみんな 泣せて遣る氣

一 だか 何とかわつたしゆこふて有ふかな

ト 是を聞て升五郎むつとして きせるを仕廻 身支度して立て行ふ
とする

升五

一 皆様是ニムリ升せ

此

一 是／＼ 口よせ殿 どこへムル

升五

一 こちの法は大切な梓へアツサ／＼の法 慰へナクサミ／＼に成ことなら御暇申升
ふわいな

此

一 アゝ是／＼埒もない どふして口よせ殿を呼てなぐさみにする物てムル
またつしやい／＼

升蔵

一 マア／＼こふいふ内に早く奥へぜんを出し升ふほどに となたも座敷へ
御出被成升せ／＼

団

一 それが良／＼ 是／＼小よし そなたは由兵衛殿をつれて 奥へおじや
サア／＼いづれもムリ升せ

半

一 サア由兵衛様 ムんせいナア

三甫

一 左様なら 御ちそふに成り升ふか

皆／＼

一 サア／＼ムリませ／＼

団

一 さらばせうばんいたそふか

ト 歌二成り 団蔵 半四郎 宗十郎 皆々奥へは入ル 此歌の内

花道より大七羽折衣装深あみがさの侍のなりにて 又太郎 奴の形
りふろ敷とそふりとを持出て来る

大七

一 浪平 此家の内へあん内こふてよかろうふ

又

一 ネイ／＼畏り升てムリ升ル ○ たれぞ頼ふ 次郎作は宿ニおいやるか

団

一 どなたでムリ升ル 次郎作 宿におり升ル

ト 団蔵 奥より出てくる 直に門口へ立かゝり

やアあなた様は此企の藤内様ではムリ升せぬか

大

一 次郎作在宿召れたか

団 一 まづ／＼ 是へおとをり被成升ふ

大 一 然らば免し召れい

ト は入ル 上の方へすはる

団 一 早速ながら承り升ふは 藤内様ニはいか様なる御用で今日御出被成升た

ぞ 大 一身共が参たること 不申込も次郎作 其方承知て有ふ 兼而申し入たる

政子御前の御頼 比企の藤内へ御挨拶がしてもらいたい

団 一 いか様なる御用でムリ升たやら 政子御前様のお頼の御用 拙者は失念

仕り升た

大 一 とぼけるな次郎作 先達而 其方へ政子御前の御頼の御用ハ駿河一国に

かくれなき吉岡染の一流 何卒奥方ニ而御慰ニ被遊度 其方が娘の小よし

かまくらへ被召 兼房染の染方伝授有様ニとのお頼 最前申達れ共 今以挨拶なきゆへ かく申比企の藤内 又御立越へ 同道致て参る様ニとの政所よ

りの御頼み 有無の返答承ろふ

団 一 左様なこともムリ升たか 田舎なれども吉岡染の一流 政子御前様の思

召付ニ而 アノ奥方ニ而御なぐさみに兼房染を御染被成んと 拙者が娘小よしをかまくら表へ上 ひとの御頼の御用申さば われ／＼つれの娘の小よし

かよふのことなればこそ 政子御前様の 上ヶひ との被仰付 有がたひ

ことじやと存升て 早速差上升ふと御請申升る筈なれ共 此儀計りはいく重

にも御免ん被成て被下ませい

大 一 スリヤ如何様ニ政子御膳の御頼でも其方がむすめの小よしは差上ることは罷成らぬか

団 一 譬 上ケ升てからが染物の事は何にも存升ぬ 娘の小よし御用にも立升ぬ 田舎そだちぶこつ物此儀計りは幾重にも御免ん被成て下されませい

大 一 吉岡一流の染物のことは 何にも知らぬ娘故 差上られぬと申スのか

団 一 左よふ／＼

大 一 譬 染物の儀はぞんせぬにもいたせ 一旦 被仰出たる御頼の御用 娘小よしをかまくらへ同道なし 直々にやう事を申上 ぞんせぬことなら返して呉ふ まづ／＼小よしをわたし召れい

団 一 ソリヤ難題と申ものでムリ升ル 何も知らぬ娘の小よしむりむたいに引立てかまくらさんがい江 御つれ被成やうとは成升ぬぞ 御曆々じやと存て気をながふ挨拶すれば つき上り染物のことしらずは知らぬでかまくらからかへそふとは何の事 おかつしやりませ 此次郎作か大事の娘 めつたに外へやることは成り升ぬ

大 一 いよ／＼罷成らぬといふのか

団 一 ならぬといふのじや 染物は商売から兼房染は家の一流 次郎作の娘小よし しらいで何と致そふ 存ておつても氣にくわぬ御意ニ恐れて藤内殿へ御渡し申ふと言やうな此親仁ではムらぬぞ あたぶのわるいおかつしやりませ

大 一

エ おのれはな

ト 刀を引きよせる 又太郎 そばへよつて

又 一

もし／＼ 旦那様 まつ／＼お扣被成升ふ

大 一

テモあまりと申せば

又 一

ハテ扱 よふり升ル 拙者か得心致スよふに次郎作へ申升るてふり升

ふ 一

ト 大七をなだめ 団蔵がそばへ行

成程気性のおもしろい次郎作殿の昔かたぎ ならぬことはならぬと舌にちり
もつかず さつぱりと言てしまつたる今の挨拶 イヤきつい物でござんす 時
にこふでござんす 貴様の娘子小よし殿を政子御膳様のお頼でおらが旦那の藤
内様かかま倉江御同道被成ても 只のこしやアこんせぬぞへ 先御支度
金も被下て 其上か往來の路銀 かまくらへ行ば直に御拝領物綾や縮緬緞子
羽二重櫛笄や御小そではなんほ成共貰ひ次第 むまい物はくひあき物見遊山
は毎日木に餅のなる娘の仕合せ なんと了簡を仕直して 得心する気はこん
せぬか とふでござんす／＼

団 一

一 おいて貰ふ なんぼ在郷の紺屋でも壹人り娘のアノ小よし 遣ふと思ふ
所へ遣る事に衣類金銀がほしかるふかとの様な身二なれはとて 得心もせぬ
所へ 金取てやるよふなさもし根生の有る次郎作ではないぞ 賤しい町人
じやとあな取て 金銀で面うはろふとは 何のことじやおいて貰ふわへ

又 一 そんならどの様にすゝめても藤内様へ娘小よしをやらないのか

一 団 其様なことに挨拶をする口は持ぬ サア／＼きり／＼とかへらしやれ
さらば奥へ行て皆の衆へあいさつせふか

ト 立てゆかふとする

又 一 次郎作まちやれ 御身様が得心せずば此浪平が直わたりに渡つて 娘の
小よしをつれて行べいか のきやアがれ

ト 団蔵を引のけ行ふとする 団蔵見ことに又太郎を取て投ル 又太
郎きもを潰ス 団蔵直に引おこして

一 団 是はしたり 年寄の龜相て ついちよつと障たよふたが どこもいたみ
はしませぬか

又 一 藤内様今の手の内を御らん被成升たか

大 一 成程聞及んたる吉岡兼房 今の手の内きいた物た おもしろい 貰ひか
ゝつた娘の小よし ならぬといへば刀の手前 相手二して成共所望する サ
ア藤内が相手になれ

一 団 アノいわつしやることわいの ついてもこける様な此年寄 血気さかり
の御侍様のお相手になさりやうとは ワリヤむたいといふものでムリ升ルわ
いの
大

一 むたいでも難題でも次郎作なれは相手にはせぬ きけは以前か吉岡兼房
業のきゝたる親仁 おもしろい サア藤内が相手になれ

ト 差そへを団蔵に突付る

サア相手になれ／＼

一 団 是は又迷惑千万な 以前は何で有ふ共 今は紺屋の此

次郎作どふしてお相手になられ升ふ　ゆるさつしやつて下され升セ

大

一　ソリヤひきやうだ　相手になつて勝負の上で娘の小よしはともかくも
サア　藤内が相手になれ／＼

ト　団蔵　差ぞへを突付てこずき廻ス　団蔵　おど／＼して居る　又

太郎　団蔵を引よせて

又

一　ヤイ　おいぼれめ　うなアよくたつた今　此浪平を物の見ことにやらか
したな　某は怖くなひぞ　腕にすのなひ此浪平　力づくで相手に成べい　サ
アこふ取たらとふするのだ

ト　団蔵か胸尽しを取て引寄ル　団蔵　其手に取ついて　よろしく有
べし

一　団

一　是／＼奴殿　どふしてこなたの相手に成ふぞ　マア／＼爰はなして貰ふ

又

一　すつぽんが時をつくつても　こふした腕かはなれるものか　相手になら
ねへか／＼

ト　団蔵をこづき廻ス　団蔵よろしくして

一　団

一　これ／＼としよりをどふするのじや／＼

又

一　とふする物だ　相手にするのだ

大

一　こりや／＼　浪平其俣次郎作を身共が旅宿へ召つれ参れ　きうめいさせ
て挨拶聞ふ　必ぬかるな

又

一　心得ました

大

一　参れ

又

一　ねイ

一 団
としよりをどふ被成升ル 御免被成て下さりませ／＼
一 又
浪平と壺所にこふうしやアがれ

ト 大七 先ニ立 又太郎団蔵を引摺り向ふへ行 在郷歌ニ成り 花
道より団十郎 広袖着流し たつゝけ 紺の足袋 日和下たの形り
ニ而かたへ手拭を置 はけを懸ケたる手桶と簇を懸ケたる張物を両
方の手ニ提て出てくる 花道中ニ而大七又太郎を押返し 直にぶた
いへきて又太郎を取て投 団蔵を囲ふ 大七かゝるを見ことニ投て

団十

一 おやじ様 只今かへり升た

団

一 勝助己は今まで何をしていたのじや

団十

一 おきゝ被成ませ 私も今夜は五月の廿六夜待 早く内へ帰て夜喰の手伝
でも致升ふと存升たが 友だちの申升には 今度アノ不二の裾野の脇へ曾我
の兄弟の人々を正面あら人神と両社に祝ひこめるとのこと 此由井の宿から
も所の外聞だから なんとこのぼりでも染て奉納せふとの若い物の談合 染る
事なら商売づくと言云ニタ言云 それにかゝつており升たが なんと有が
たい事じやアムリ升ぬか

大

一 是ゑエ／＼うなア／＼ 武士を茶ニしてよく投げたナ サア誤り升たと
ぬかせはよし 無法をぬかしやア 手は見せぬぞよ

団十

一 此べらばふ待め あれから見りやア大事の親仁様を手ごめにして どつ
ちへかうしやアがる所へ来かゝつた此勝助

投た計りで迎たら迎次第と了簡していればよいかと思ふて 何だゆるさねへ
とぬかすのか うぬらが方よりおれが方からゆるさねへは サア爰へ出て二
人共 ちよ／＼こなへ 勝助様の下たの裏をはいけんしろ 赤いわしでもひ
ねくり廻しやがると其分にしちやアかへさねへぞ

又

一 其いけつ口を切下けてくりやうか

ト 抜て切懸る 団十郎直に其刀をひつたくり 大七を投たし むね
打にする 又太郎団十郎がきゝ腕を取て

マテさちやア うぬが次郎作か 息子の侍勝助だな 骨が有ておもしろい
おれか相手に成べいか

団十

一 此ぶんぬきめが 同じ様に何だみつともねへ 勝助様の御手二とつとい
てどふするのだ はなしやアがれ

ト引たをす 直に立廻二而又太郎を引寄 刀をふり上る

団

一 ヤイ／＼町人が人を切てもよいか

団十

一 エ 何こいつらを

団

一 己は／＼ 大それたやつのか 刃物をふり上けて ソリヤどふするのじや

団十

一 サアこりやア

団

一 早ふお納おらぬか

団十

一 きり下けてくれべいか

団

一 きり／＼お納おらぬか

団十

一 エ、うぬをな

団

一 お納おろふ

団十
一 お納升はな

ト 刀をさやにお納て投出ス

団
一 勝助 爰へうせふ

団十
一 ハイ

団
一 きり／＼こぬか

団十
一 ハイ参り升

ト もぢ／＼と団蔵がそばへすはる

団
一 ヤイ勝助おのれは／＼ 又しても／＼ 人を投たりほうつたり 大それた刃物ざんまい それが紺屋の次郎作が伴の身持か 不埒者といわふか ばか物といわふか 憎ひやつ 重而から おてんごふひろいたら よふ其俣にしておかふぞ 此のちきつとたしなみおらうぞ

団十
一 親仁様のおつしやることでムリ升が 張場からかへりがけに あれから内を見れば こいつら二人リ親仁様を手込ニして むせふに引摺て参り升ものを どふして子の身て見ていられう 日頃 力わざをするな 刃物ざんまいするな といわつしやり升ことを 全くわすれはいたし升ぬが 是計りは見ぬ顔をさつしやり升て こいつらがすしほねをどふぞ 抜かして下さりませ

団
一 ヤイ／＼まだぬかすか 此次郎作を何者じやとおもふ吉岡一流の兵法のしゆれん 人も知たる此兼房 今でこそ町人なれ 以前の心になつて見れば そいつらが譬江五十人や百人切込んだれは連 只おこふか まして壺人や二人 相手にもたらぬと思ふて 了簡して手込に成て

居るを知りおらぬか たわけ物 すつこんで居おろふ サア比企の藤内殿
得心のなひ娘小よし かまくら表へやる事はならぬ程に ヲツトいつて帰り
やれ 又此上より利屈くそふおいやると 此次郎作が堪忍袋の破れ口 主従
共にかたわに成て かへらぎ成まい 所望なら 是悲に及ぬ昔の武士に立帰
り 吉岡兼房が早手の内 御目に懸ふか

ト 羽織を脱 そろ／＼ひぎを直す

大

一 ア、是／＼ 是は次郎作やぼらしい 其元の得心召れぬ娘子の小よし殿
なにゆへ身共がかまくらへ同道いたそふぞ 押て申たは藤内か不調法 必
お気にさへられな
是／＼手をついて御詫申ス／＼

ト 手をついて なんべんも じぎをして

是／＼浪平手込にしたはその方の不調法 次郎作殿へも勝助様へもあいさつ
いたせ／＼

又

一 左様／＼次郎作殿 畢竟 其元様を吉岡兼房どのと乍存 むたいな事を
申懸たは御娘子の小よし殿をかまくら表へ御同道申たひゆへ 其ことが御得
心なければ 是悲に及す 旦那を初メ此奴迄相手ニ成て下さらねはこそ あ
まい命を拾ふたと申もの 最前からの慮外の段／＼ 御用捨に預り升ふ 是
／＼誤てムルぞ／＼

ト 手をついて むしやうにじぎをする

それ程に主従の侘召さるゝこと 町人の次郎作了簡せいてなんといたそふ
申さば御曆々の藤内様 御手上られて被下い／＼

大 然らば先刻より法外の段 了簡おしやるか

一 何がさて／＼

大 一 忝ない／＼ 浪平次郎作どのには了簡召るゝとのこと なんと忝ないで
はないか

又 一 左様／＼ 次郎作殿を手込にして 引立升る所へ 向ふから勝助殿の被
出た時にはなむ三室いつもの通りに ぶちのめされてこうも有ふかと 出ほ
ふたいな歌でも歌つて引込ざアなるめへとぞんじた所に了簡して被下升たと
は此様な忝ひことはムリ升ぬ 此ほとぼりのさめぬうちに何とお帰成升せぬ

大 か 一 成程／＼ 帰りは帰ろふが かしながら次郎作殿 何と此の上の藤内か
御頼 吉岡一流の兼房染の染方 あら増咄て聞せては下さるまいか

一 成ほど外様ならぬ政子御前様よりの御使 覚へたとをりくはしくはなし
て聞せ升ふ

大 一 是は忝なひ

一 団 マア／＼ 爰ははしぢか 奥の小座敷へ御同道致そふ

大 一 然らば案内をたのみ升る

一 団 左様ならばこふムリ升ふ

ト 歌に成り 大七団蔵奥へは入ル

団十

一 いかさまいくつに成ても親程怖ひものはない 張場からかへるがいなや
たばこさへ呑間がなひ さらば壺ぶくのんで染物を片付べいか

ト たばこを出して吸付る

又

一 いかさま わしも壺ぶく吸付よふか どれ／＼火を壺つかり升べいか
団十

一 吸付たら爰へ来て呑つしやい 門口で呑で大家様に叱られぬがよい

又

一 どれ／＼たばこのせうばんすべいか

ト 団十郎がそはへより きせるを出して吸付る

何と勝助殿とやら 人間の境界もかなしいものじやごんせぬか とりわけ中
間奉公といふ物はいま／＼しいもので かのしはすも日の六月も人の土そ
うりを抓てくらすといふは なんとはかない物じやアごんせぬか

団十

一 そふいわつしやるナ 式合半でも武士のけらい 花ハ桜木人は武士 わ
しやア 侍がうら山しうごんす

又

一 うら山しいとは何よりのこと わしらが様なふ人物な者でさへ 老年に
三両二両見た所がじんぴんといふ 面躰のやうす どこへ出しても侍がつこ
ふ おいしい物を握り殺ナ

団十

一 いわれていふのじやアごんせぬが こふして居てさへ侍 勝助／＼と言
れるによつて いつそひと思ひに武士にでも成て仕廻升ふか

又 夫なれは請合て立身か成程に マア／＼御手廻りの

明でもあらば つゝかけ七両につら扶持でも 御身様のきりやうじや 恥て
ごんせうが

団十

一 此人としたことが親の商売をころんで侍になれば わしやアこなたの様
ニかいころしの請合 辻番に居様な奉公はいやでごんす わしやア侍に成ル
くらいなら 何の何がしといふ侍に成る心さ

又

一 ハテナ

団十

一 五十年か七十年の命を持て 一生かゝんでくらすといふは 思い付きで
もこんすまい それに引かへて刀の威光 ふじのすそのゝ夏狩御遊覧 うら
山しいは 頼朝さまのお身の上 天下をせうはいに被成るゝとは 結構なこ
とじやアごんせぬか どふぞ壺度あんな真似をしてみたいと思ふても 高の
知れた町人の息子 親が親なら侍にも成らりやうニ 町人とは何といま／＼
しいことじやアごんせぬか
又

一 親ニよるべいか ぞく生ニよるべいか 既に高祖は周のてう舜は賤しき
土民なれ共 時節至れば百王に成たるためしも有る 見懸ニ似合ぬ町人の勝
助 たのもしい男だわへ

団十

一 ア、埒もない ついとんだ咄を仕出した トリヤ最ふ 一ぶくのんで日
待の客へあいさつに行べいか

ト 言ながら たばこを入をみて

なむ三 たはこが壺ぶくもないは 奴殿たはこを壺ぶく下されまし

ト 手を出ス

又
一 十匁八文で吞にくかんべいが 吞で見さつしやい

ト 小ゆひを見付ケて
こりやアお身様の右の小指か

ト 見よふとする 団十郎恠りして左りの手を出す 又太郎其手を取て
是此手のすしは天下すじ テモ珍しい

ト 恠りして手を引

団十

一 ア、埒もない 色々なことをいふ人だ

又

一 胸中にいちもつ有て じつと納メしふてきの魂 テモおくゆかしい ○
奥でゆるりとはなすべいか

ト 歌に成り 又太郎下座へは入ル ト 奥より勘左衛門 此蔵 升
蔵 升五郎出てくる

勘 一 そこにムルは勝助殿かいの やれ／＼けふは いかひ御用馳走に成升た

団十

一 是は／＼となたもよふムリ升た

此

一 さて／＼いつもながら茶飯をとほふもなくくひ升た

団十

一 お定りの日待料り 夜食がすんでも何もはねた思ひ付もこんすまいな

升

一 もし／＼そこを今夜は板勘様の思ひ付でせつきやうの代りに口よせどの
をつれて御出被成て たつた今爰で初る所でムリ升ルが なんと廿六夜の晩
に口よせとはめづらしいしゆこふでムリ升ふ

団十

一 コリヤア中々おもしろい思ひ付だワへ サア／＼聞升

べい／＼ 初メさつしやい／＼

此

一 かつてんだ／＼ 是／＼ 奇麗な茶わんに水をくんで ぼんにのせて持て来やれ

升蔵

一 アイ／＼ 定而櫛も入りそふなこと どれ／＼ 口よせどの 本間本式ニどれ／＼ こふしてはおくものだ

ト 盆に茶わんをのせて しきみを付て 升五郎が前へおく 升五郎 懷より服紗包を出して下二置 其中より竹の弓と棒を出して あぐらをかき 口よせのこなし よろしく有べし

勘

一 どれ／＼ わしが先へよせて貰ひ升ふか 最ふつれ合ニ別れて十二年 来年が十三年 長の月日を此様ニうき名も立ず ごけに成りて日をくらした此 おかん 草葉のかげでもさぞ仏様も 嬉しふ思ふてゝろふわいの どれ／＼ 水向せふかいの なむあみだぶつ／＼

ト 水を向る 升五郎つるをならし

升蔵

一 七すじの道 其内に三筋の道 其内 七糸より細き道をたどり／＼ て石や仏壇がゆるきわたる水向殿を見上てよろふか 見下ケてよろふか より来るを弓取てよろふか

勘

一 まつすぐによらつしやい／＼

升蔵

一 知るまいと思ふか枕ぞへ まだ三七日も立ぬ内に 見せの手代とふずくつて それから後は仏壇江花をも上ず 命日にもせんこふ壺る上げもせず只放埒に身上を やがて

つぶすで有ふかと 夫て迷ふてうかばぬぞよ

勘 一 是／＼弓取殿 其様なことはないわいの なむあみだぶつ／＼

升五

一 六道の道に迷ふて居るから回向茶 とふしても九十九疋の鷹かうばひ取
てとゝかぬから みさき祭りをしておくりやれ 皆の僧名代名残りに最老る
水を呉れておかへしやれ 行よ戻ルよ元の浄土へ

勘

一 やれ／＼御太儀でゝつた たばこ参れ／＼

団十

一 中／＼不思儀なものだはへ

此

一 早来やれ／＼

ト 此蔵すりこ木を懷に入持て門口へ出る升蔵つゞいて門口へ出る

升五郎たばこをのんでゐる

時にこふだは 何とあのいちこに此摺子木を縛てよせて見よふじやアねへか

升

一 よかんべい／＼ あらなわで縛て此門口へつるして置て見よふじやごん

せぬか

此

一 それがよかるふ

升

一 どれ／＼こふして置升ふ／＼

ト 摺子木をあらなわで縛り門口へ提 此蔵升蔵内へは入ル 所に水

を汲かへて

此

一 早よせて貰ひ升ふ なむあみだぶつ／＼

升五

ト 水向をする 升五郎あぐらをかいて弓のつるをならして

升五

一 水も替る寄主も替る かわらにやア寄らぬだりやう

置てもおれ 寄らざらにやア

升

一 真直に寄らしやい／＼

升五

一 高野山に居たならば此様に縛られることも有まひに 外にもない 身を
此様にうきめを見せるは情なひ ほどいて呉れは其とをり 長く苦げんを見
せるなら 押付羽根がはへて飛んで行ぞよ 思ひ知れ 早く水をお引きやれ
よ お見やげ立 さらば／＼

此

一 何と怖ひものじやアないか もふ／＼ 重テからこんなことはしないが
よい／＼

升

一 どれ／＼羽根がはへて飛ぬ内に縄を解ふか どふやらこきびがわるく成てき

此

一 早くおろしやれ／＼

ト いふ内に升蔵摺木をおろす 縄をとく 此内に団十郎水を汲かへ

て持て来て

団十

一 ちか頃せわながら わしも寄せて貰ひ升ふ なむあみだぶつ／＼

ト 水を向る 升五郎 又弦をならして

升五

一 一番が変れば寄り人もかわる つる／＼も一座に有ながら 知らぬ兒見ぬ
兒をしている子たがらのこへが恋しい 余所なから唐の鏡とは アノ頼朝と
はしらざるや

ト 聞内に恟りして団十郎茶わんの水を明る 升五郎だまる

勘

一 是々 勝助殿 なぜ水をこぼさつしやたのじや／＼

団十

一 何と役にも立ぬことを聞ふより なんとこなさん立は 奥の壱間て 酒
でも初メさつしやらぬか

此 いかさま酒はよふろふ 口よせを聞たらどふやら心がしんに成り升た
団十

一 是々惣助肴でも出して初メたがよい／＼

升 ハイ／＼サア／＼奥へまりませ／＼

此 さらにわつさりと呑かけふか

一 勝助殿待っているぞへ

升 サアムりませ

ト 相方に成り 此蔵 勘左エ門 升蔵 奥へは入ル 団十郎 あた
りをみて 又水を汲出し 盆のうへへのせ 升五郎がそはへ行

団十

一 がてんのゆかぬ今の寄人 しんずるにはたらね共 人様ぬ我身の上 水
を手向て聞出そふか なむあみだぶつ／＼

ト 又水を向る ト うすどろ／＼二成り せふちう火燃ル 升五郎
弓をならして

升五

一 又も寄来るやそなたの父は頼朝殿 乳房は大友四郎太夫経家の娘政子の
前を憚りて 初時より預けしぞ 誠の父は頼朝殿 今の親仮りの親守りと成
は 自らが片身山吹 水の御旗一流れ系図の一巻もろ共に兼房に預け置たれ
ば尋もとめて 我手に入れよ 一法師能宣 親に一世の浮別れ 兒見る事も
ならざるか さらに／＼

ト どろ／＼／＼

団十

一 思ひもよらぬ我身の上 けふの今まで次郎作が倅と思ひの外 父は頼朝
母君は大友の四郎太夫経家の娘とや 山

吹水の旗を流れ 景図の一巻もろ共に アノ次郎作へ預け置しと有る今のつ
げ うたがいもなき源家の正流一法師とは我こと成るか ヲ、思ひもよらぬ
身のうへじやなア

升五

一 ヤ、、、、、そんならそなたか頼朝様の御子かひの

トおどろく内 団十郎升五郎を引よせ べころして

団十

一 きじも鳴ずば打れまいもの なむあみだぶづ／＼

ト 歌二成り 升五郎が死がいをかくし 気を付ては入ル 此歌の内

三浦蔵 たばこ盆を提て出てくる 跡より半四郎 行燈を提出る

三浦

一 是は／＼最ふ行燈か出るそふだ コリヤ帰らずは成るまいわへ

半 一 丁吉様としたことが行燈か出ると なぜ帰ろふといわしやんすへ

一 三 廿六夜は紺屋のもの日 行燈か出れば 昼夜ヲ喰ねばならぬわいな

半 一 半 なのこつちやいな

一 三 品川で遊んで居る気さ

半 一 半 おかしやんせいな

一 三 時二昼の内は 其様でもなかつたが アノ吸物椀で●はよ程きけるはへ

半 一 半 丁吉様 其様二酔しやんすと お前はたわいが

一 三 ムんせぬかへ

一 三 三 そこが生酔本性たがはずどの様なことでも きつと覚へていでござんす

一 半 そんならわたしがお前を男と見かけてお頼申たいことがムんすが 何と
頼れ被成て下さんすまいかいなア

一 三 頼たいと言かけられてどんなことでも跡へ引よふな丁子やの吉兵衛じや
アごんせぬ サア／＼其頼たいといふはどんなことでごんすぞ

一 半 サアそれはな

一 三 サアそれは

一 半 それはな

一 三 おれ二氣が有るといふことか

一 半 なんのこつちやいな

一 三 おれが事じやアごんせぬか

一 半 知れたこといなア

一 三 おかたじけ

一 半 丁吉様わたしがお前を頼たいといふことは アノなんじやわいな

一 三 エ、埒の明かない きり／＼いつたがよぶごんす

一 半 そんならわたしがいふ程ニ 必わろふて下さんすなへ

一 三 まだいひもしないで

一 半 いわふかいな

一 三 エ、人じらしな

一 半 そんならいふぞへ

一 三 あれまださ

一 半 丁吉様

三　　一　　三
　　なんだよ

半　　一　　半
　　仲人して下さんせ

三　　一　　三
　　なんだ仲人してくれろ

半　　一　　半
　　アイ　仲人して下さんせいな

三　　一　　三
　　此丁字屋の吉兵衛に

半　　一　　半
　　頼たいとは此事じやわいな

三　　一　　三
　　ヲヤ／＼／＼

半　　一　　半
　　ヲゝはづかし

三　　一　　三
　　ソリヤアはや仲人に成てやるまいものでもないが　たれとたれが仲人に
成てやるのでごんす

半　　一　　半
　　サアお前ニ仲人頼むのはな　アノ由兵衛様と此小よしが中を　仲人して
下さんせといふことじやわいな

三　　一　　三
　　そんならアノ梅屋浜の由兵衛とそもじとの中をおれに仲人をしてくれろ
といふことか

半　　一　　半
　　どぞお前を頼むわいな

三　　一　　三
　　成ほど　ソリヤア仲人に頼れまいものでもないが　けふ初メて爰の内て
近付ニ成たアノ由兵衛　どふいふ気ひつの男やら　内のくらし方　身上合
直々に逢て聞た上でならば　めつたニ仲人に成て親仁殿へは言出れまひ　マ
アなんで有ふとアノ由兵衛も得心のことならどふぞして此吉兵衛ニ逢せるが
よい　逢ての上で此吉兵衛か仲人に成て遣ふわさ

一 半 そんなら由兵衛様さへ得心なら アノお前があふて下さんすかへ
一 三 直々に談合して仲人二成て遣ふわいの
一 半 そんなら由兵衛様に今逢ふて下さんせへ
一 三 逢て遣ふ／＼
一 半 エ、嬉しうムんす 由兵衛様へ／＼ ちやつと早ふムんせいナア
一 宗 合点じや／＼

ト 相方二成 奥より宗十郎出てくる

けたゝましようんだが何の用でこんすぞ

一 半 早う爰へムんせいなア

一 宗 是程爰へ来ているわいの

一 半 是イなア 由兵衛様 アノ丁吉様が仲人して遣ふといわ
しやんす程に ちやつと早ふあふて 礼いふて下さんせいなア

宗

是は／＼忝ない 近頃丁吉殿へかやふ申もはづかしうムれ共 不計致したこ
とで申かわし升たる小よしどのゝ事 何卒其元のおせわで次郎作殿へ●え貫
ひ升やふに 仲人を被成て下さらば拙者二に置忝ふ存升る

三

一 成程そふ●で立派ニものを言ふた所 人物といゝ男ぶりといゝ 小よ
し殿が仲人を言頼たもむりはごんせぬ どちちを見てても水の出はな 合惚れ
のことならよふごんす わしが仲人に成て遣り升ふ

宗

一 是は／＼早速の御承知 忝ふムリ升ル

三

一 しかしながら世間のとし寄と違つて 堅イと出しちやアわる堅ひアノ次
郎作殿 其上に男に似合ぬ女のくさつた

よふニりん気深ひがアノ人の疵 世間に珍しい親仁様のやきもち わしが仲人をするニ付ても貴様の身の上をよく／＼聞にやア どふもあいさつか仕にくいといふ物 マア由兵衛殿の内のくらし方はどふでこんす

宗

一 くらし方の儀は何でムル どふやらでムる ヲ、ワレ／＼蒲原宿の町の真中 居宅間口か七間間中 奥行が廿五間 上蔵が二戸前 下蔵が五戸前 支配人と申が三人 大番頭が五人 若イ物が廿五人 こし元から物ぬいから料り人から飯たきへかけまして 家内のくらしが七十五人 米はから白を立て春 居風呂が式所 質両がへ屋の株に酒問屋の株を入升て 老年二積り升たならば 壱万四五千両の商ひ高でもムリ升ふか

ト 三浦蔵きもをつぶして

三

一 さて／＼人の身の上といふ物は見かけによらぬ物でこんす 一寸見たところ梅屋洪のかつぎ商ひ 老入り物か夫婦かけ向かひて有ふと思ふた所七十五人くらすとは大商人でこんすの

宗

一 かやふニかたへぼうを置いて 梅屋洪を商ひ升るも 半分は慰み 押付アノ桶屋天びんぼうに荷繕をさせ升て アノ縄を金糸のいとうでうたせ升ふと存

升

三

一 もふそれからちのかわをむく計りてムルの

宗

一 大名ならは火にくばろふと存升

三

一 そんなら定て女房も妻も手懸も内ニ有るてごんせふの

宗

一 サア その女房や妻がなければこそ 此小よし殿を貰ひたい

我等が願ひどふぞ次郎作殿へお頼被成て下されハ

三 一 よふごんす 吞込升た 氣づかいさつしやるな わしが仲人に成て小よし殿を貰ひ升て遣り升ふわいの

宗 一 左様なら仲人に成て下さり升か

三 一 わしがよいやうニかいて遣り升ふ

宗 一 是／＼小よし殿 仲人ニ成て遣ふといの

半 一 本に此様なうれしいことはムんセぬわいな よし兵衛さま

宗 一 小よし殿

奥 一 エ、忝ふムリ升ル

三 一 そんならわしがどふいふ様子か親仁殿ニ合て来升ふ程ニ マア／＼二人りながらはなして待てムれ／＼

半 一 そんならよひやうにとゝ様へいふて下さんせ

三 一 がつてんだ／＼

宗 一 いかゐおせわでムリ升ル

三 一 何さお前

半 一 そんなら爰に待て居るぞへ

三 一 さらば次郎作殿に合て来べいか

ト 相方に成り 三甫蔵おくへは入ル

半 一 由兵衛様へとゝ様が得心して遣ふといわしやんすり
や 一 わたしやお前の女房じやぞへ

宗 一 しれたこといの

半 一 そんなら もつとこちへ寄て下さんせいな

一宗 なんの丁吉殿の挨拶次第にふうふにならるゝ二人りが中 今からそばへ
 半 寄置せいでもよいわいの

一宗 其様なことじやムんせぬ 見せたい物が有ルわいな

一宗 みせたい物とは何で有ふぞ

一宗 一寸見て下さんせいな

一宗 何んじや
 ト そばへよる

一宗 是じやわいな
 ト 宗十郎が手を取て懐へ入ル 宗十郎 思入有て

一宗 やゝゝゝゝゝそんなら是は

一宗 帯じやわいな

一宗 本に今月で五か月で有たな

一宗 とゝ様へは言れねど アノ兄様ニ咄てけふの日まちを
 身祝ひとわたしや此はら帯を
 ト 嬉しそふにうつむく

一宗 廿六夜待を幸にはら帯の祝ひとは定而愛染様の御利生で 愛敬の有子で
 有ふと思へば 本に今から樂じやわいの

一宗 ソリヤうそじやムんせぬかへ

一宗 とふしてマア是がうそでよい物かいなア

一宗 いへ／＼うそでムんせふ

一宗 なんで／＼

一宗 なんでといふて是由兵衛様 なぜかくしては下さんすへ

一宗 なにおいの

一宗 小梅様のことを

一宗 小梅が事とは

半 一
わたしやしつてゐるわいな

ト 宗十郎 兒で思入をす

正木次友様とやらの御娘子の小梅様といふお方は 由兵衛様 お前は言名付
のおかみ様でムンせふがな

宗 一

サアそれは

半 一

とふから聞て居るわいな

宗 一

なめら三宝

半 一

わたしや愜氣する氣はない物を 隠されたのがおかしいわいな

宗 一

其様にいふてたもれば かくそう様はない 其正木次友といふ人の娘小
梅とは 此由兵衛が初時からの其名付 盛人の後はふう婦にせふと親々立の
やくそくなれ共 分有て アノかまくらを立のいたる此由兵衛 ●にわかれ
て最ふ三年夫から便りもおとづれもない小梅が身の上 言号とは言ふ物の今
では縁を組ぬも同前 とふからそなたに咄そふとは思ふたれ共 ひよつと女
子の廻り氣で はらでも立ては氣のどくじやと思ふて つい夫成に咄もせぬ
わいの 隠したはわしがわるかつた かんになしや／＼

半 一

其様に言て下さんすりや心にはかゝらねど わたしがどふやらりん氣し
て その様な中迄もさくよふに思ふてかと それがわたしが氣のどくじやわ
いな

宗 一

そんなら此由兵衛にアノ小梅といふ言号の女房が有ても

半 一

どふしてはらが立ふぞいな

宗 一

そんなら腹は立ぬかいの

半 一 其小梅様はちいさい時からの言号のお方 わたしやついた色事から老
●に成のじやムんせぬか そんなら其小梅様こそ腹立さんせふけれ わた
しがどふしてアノ腹が立つ物てムんすぞいな あすか日 其小梅様がお前の
所へ邏てムんしてわたしが目の前でふうふにならしやんしてもお前さへわた
しを捨て下さんせにや ちつ共腹は立ぬわいな

宗 一 したり 言号の小梅と目の前でふうふに成ても そなたを此由兵衛か捨
さへせねば ちつ共腹は立ぬとは 賢女と云ふか てい女といわふか 驚入
たる小よしが心底 かんしん／＼

半 一 是いなア 由兵衛様わたしやみぢんもりん氣する氣はムんせぬが 困た
ことにはアノとゞ様ぎりの違ふたことが きついきらひてとしよらしやんし
たのに似合ぬ たいていや大方やかましい事ではムんせぬわいな

宗 一 そんならアノ次郎作殿は年寄に似合ぬ焼餅やきかいの

半 一 氣のどくな事でムんすわいな

宗 一 是はならぬぞ

ト 奥にて

一 団 由兵衛殿／＼

一 半 一 アレ／＼とゞ様が爰へムんすはいな

一 団 由兵衛殿や／＼

ト 相方に成 団藏奥より盃台を持て出てくる

一 半 一 とゞ様由兵衛様は爰でムんすわいな

一 団 一本に由兵衛殿 爰にで有た 奥を一へんたつね升たわいな

一 宗 一 是は／＼殊の外の御ち走に預り升た 余り夜の更ぬ内 最ふ御暇申升ふ

一 團 是／＼此由井の宿から蒲原迄は町続キ 少々更ても大事こんせぬ マア
／＼咄てゆかつしやい

半 夫／＼折かく とゝさまが止てムんす程に もちつと嘶てムんせいな
一 宗 そんなら はなして参り升ふか

一 團 サア／＼爰へ／＼

一 宗 ハイ／＼

一 團 是／＼小よし 何と此由兵衛殿は人柄と言 はつめいと言 能ひ男ては
ないかいの

半 アイ そふじやそふにムんすわいな

一 團 なるふことなら小よしにも 此由兵衛殿の様な人を男に
持せてやりたい物じやが 何と小よし そなたの心はどふしやいの

半 一 とゝ様とした事が わたしや との様な男でもお前の気さへ入た御人な
ら わたしやちつとも大事ムんせぬわいな

一 團 アレあれを聞て下されい 由兵衛殿 との様な男でも親の気ニさへ入た
ものなら ちつとも大事ないと親の心を休メこう／＼なアノあいさつ かし
こひやつではムらぬか

一 宗 左様でムル

一 團 是／＼小よし そなたは何と思やるか知らぬが發明らしい アノ由兵衛
どののよふな人と 此親の次郎作は夫婦ニしたいと思へ共 縁組計りは親の
了簡ニも任ぬ物 マアどふあるふぞ いふて見や

半 一 ソリヤ もふわたしが心にも由兵衛殿と女夫ニさへならるゝことなら

一 団 得心してふう婦に成るか

一 半 ならいではないな

一 団 やれ／＼そなたはこう／＼な物じやな 時に由兵衛殿 田舎そだちの次郎作が娘 定而其元の気ニは入ルまいが 是此小よしをどふぞこなたの女房ニ持て遣て下さるまいか

一 宗 おつた小よし殿のことなれば 人頼を致して成共 貰ひ請たいと存て

一 団 女房に持て下さるか

一 宗 ソリヤもふ此方から申出したいと存ておつたればこそ先程持て参たアノ玉川の名酒 此由兵衛が心には頼の印の柳樽 祝ひ升てのアノ手土産 此方から願ひ升ても小よし殿を貰ひ請たい心てゐる

一 団 そんなら貰ふたアノ名酒は由兵衛殿の心ては この小よしを貰ひ請たい頼の印の心かいの

一 宗 はづかしながら左様でムル

一 団 そふ聞ては弥忝ない アノ名酒目出たふ受納致そふわいの

一 宗 左様ならば御受納被成て下さるか

一 団 受納せいでわいの

一 半 ソリヤ私のことかいな

一 団 そんならそなたもうれしいか

一 半 うれしうのふてわいな

一 団 そんなら幸ひふう婦ニせふか

半 一 ハイ／＼

一 善は急げじや今爰てアノ玉川の名酒をひらいてわざと盃さそふかいの
両人

一 ハイ／＼ 有がたふムり升る

一 団 そんなら 盃をする心か

一 宗 いたしませいでは

一 団 する心か

一 半 せいでわいな

一 団 ふうふ二なるか

一 両人 ハイ／＼

一 団 うれしいか

一 両人 うれしうのふては

一 団 いよ／＼ふうふに

一 両人 成り升ふ

一 団 ソリヤならぬ

一 両人 エ、

一 団 ヤイ小よし よふも／＼親の目兒を盗みくさつて 此由兵衛と惚やつた
一 知るまいと思ふか 憎ひやつ の 壺人り身でも有事か アノ由兵衛には
正木次友殿の娘小梅女郎といふれつきとした女房の有男じやないか それ
を知りつゝ此由兵衛と夫婦に成たいとは不屈といわふか不所存といわふか
きりのちがうた由兵衛と

添せることは罷ならぬ

トきつといふ 半四郎泣伏す

そなた計りじやない 不埒成るは由兵衛 此次郎作が娘の小よしを手かけ
妾ニする心か よふも／＼人の大事の此娘を 疵ものニして慰むのか サア
不調法いたしたと詫言召れてかへり召れい 重而出入は罷成らぬ いかにか若
イ連 見下ケ果たる男てムルの

宗

一 たん／＼のお腹立 かねて此由兵衛一言の申訳はムらね共 一たん申か
わせし小よし殿のこと 譬へいか様成きり合がムろふ共 此由兵衛が世間は
れての女房にいたし 未々見捨升ふ様ハムらぬ程ニいく重にも御了簡被成て
なんと小よし殿を此由兵衛え下され升る事ハ叶升まいがな

団

一 小梅女郎といふ女房の有由兵衛へ 次郎作か大事の娘 此小よしがやら
りようか きり／＼内へいのふてや

宗

一 いかやふニ申ても 御得心はムらぬか

団

一 役にも立ぬこといふて長居したなら年寄の皺手でしゆふくの外へほふり
出そふか はぢかゝぬ内行ひでな

宗

一 ヘイ 何と致そふ御得心なくは最ふ御いとま致升ふ これ小よし殿 仮染
の事から言かわして ふう婦ニ成らねば此由兵衛どふも男の立ぬぎりづめ
今わかるゝか根生のわかれと成ルか命目出度ふ逢るゝか 是からそなたの心
壺つ 一寸わかれニ其顔を ○ さらば御暇申そふか

ト歌に成り 宗十郎梅屋洩の桶をかつぎ 心を残して 花道へは入ル

団 一 何ぬかすやら 大事の／＼此娘 何のおのれに添そうぞ 其つらあての
れつきとした能ひ所へ よめ入させて見せふわいの サア／＼小よし奥へお
じや

ト 手を取てつれて行ふとする ふり放して有合せたる包丁をとつて

半 一 とゝ様おさらば

ト じがいせふとする 団蔵驚き其手に取付て

団 一 ヤイ／＼小よし何てそなたはじがいするのじや 早まるな／＼

半 一 としよらしやんしたとゝ様を跡へ残して死ふぞとかくご極メしわたしが

心 とのよふニ有ふと思ふて下さんす これいなア わたしや由兵衛殿へ添

いでは

どふもいきては居られぬわいな

ト 取つきなく

団 一 早まるな／＼ 三人有子供の内 アノ惣領の勝助めは此次郎作とは訳有

る中 真実ちをわけた子といふては そなたとアノ丹波屋へでつち奉公ニ遣

て置たアノ長吉より外ニ無ひ子供どふで末／＼爰の内は勝助へ譲る物なれば

そなたは際へ嫁らす身の上 アノ由兵衛に小梅といふ女房さへなければふ

う婦ニせいてなんとせふ 末々を案するか親の因果 かわひさが余て添せぬ

のじや かならず早まるな

半 一 とゝ様のお心ざし わたしが身たけニあまれ共 由兵衛殿と添いではど

ふもいきては居られぬわいな

一 團 是程迄ニ此おやがわけをいふて聞せても
一 半 どふも生きてはいられぬわいな

ト 死ふとする 又とめて

ソリヤ何で／＼

一 團 とゝ様わたしや五日月ニなるわいな
一 半

ヤゝゝゝゝゝ

一 團 アノ由兵衛殿のたねを此身ニやどしたわいな
一 半

一 團 そんならそなたはヲゝゝゝホイ
一 半

憎ひやつじやと思ふなら 放して殺して下さんせいナ
ト 泣おとす

一 團 コリヤ早まるな添せて遣ふ
一 半

エゝ

一 團 由兵衛と夫婦ニしやう程に必／＼早まるな
一 半

一 團 そんならとゝ様由兵衛殿と
一 半

一 團 親が夫婦ニして遣ふ
一 半

一 團 ソリヤマア本のことかいな
一 半

一 團 母親のない娘のそなた 帯迄ゞたことならば アノ由兵衛と夫婦に成て
一 半 此次郎作ニうい孫見せてたもいの

一 團 そんならアノ由兵衛殿とわたしや夫婦に成るゝことかいナ
一 半

一 團 そなたの命ニかへりやうか アノ由兵衛もわかい身のうへ 定而氣を
一 半 揉て居やろふ程に あす共いわすたつた今 蒲原宿へ嫁入しや

一 半 エゝソリヤマア夢ではないか そんなら今からアノ由兵衛さん

の所へわたしをやつて下さんすかいな

団

一 やらいではないのとはいふ物のそなた計りはやられまいが 是どうぞよい
仲人か有そふなものじやかな

三

一 是／＼ 次郎作殿 其仲人に成度てさつきから奥でわしや待て居升たは
いの

ト 奥より三浦蔵升蔵出てくる

団

一 そんならこなたが仲人に成て下さるか

三

一 仲人にならねへてどふする物でこんす 相惚と言 てうどよい 夫婦中
先の身上はわしが請合 氣遣ひなしにやらつしやい升／＼

団

一 忝ない／＼ 仲人は出来たれ共 せめて葛籠の壺つもやりたいか 其さ
いりやうの男はどふぞ有まいか

此

一 其さいりやうも出来やつた 爰にこんすやくは板屋の勘兵衛が持て行て
やり升ふ

一 忝ない／＼ 仲人は丁吉どのさいりやうは板勘殿 是々惣助 そなたは
てうちん持て行が能ひ 是／＼小よし そなたの手道ぐ櫛道ぐ着類着そくを

取集メて サア／＼早ふ持てゆきや／＼

半

一 アイ／＼ そんなら取集て持てゆかふかいな

団

一 それがよい／＼

半

一 皆さんも手伝ふて下さんせいな

三

一 合点じや／＼ マア／＼葛籠から先へ出さつしやい／＼

一 升

一 がつてんでこんす／＼

此

一 是／＼しづかに仕廻つしやい 大分風がよくなつた

一 団 どれ／＼見せや 本にナア

一 半 コリヤマア 気にかゝることじやわいな

一 団 何の氣に懸ることが有物じや

一 半 じやといふても折も折 時も時 親骨が折たとはつんとかふ氣に懸ることじやわいな もしやとゝ様のお身の上に

一 団 あほふいわずと早ふゆきや

一 半 そんならとゝ様
ト 思入して

一 団 早ふゆきや

一 半 御機げんよふお出なさんせへ

一 団 サア／＼早ふ行升ふ

ト 三重に成り 升藏 先に三甫藏 半四郎 此藏葛籠 背負むかふ
へは入ル

道々氣をつけて行升ふぞや あれ／＼いそ／＼して行おるわいの さらに奥
へいてちつとの間 氣を休メよふか

ト 歌に成り団藏おくへは入ル 此歌の内 奥より団十郎 刀を提て出
てくる 跡より大七付出る

大 一 次郎作が忤勝助あいさつもなく なぜ此所へ参たのじや

一 団 十 お身様立にあいさつする口はもたねへ

大 一 たまろふ 今日此所へ罷越たるは 仮染ならぬ頼朝公の御台所政子御前
よりの御頼の御用 吉岡一流の兼房染の染方 次郎作が娘なれば 小よしと
やらが存ておらんとのことゆえ 同道せんと参りし処 得心のなき親次郎作
娘小よしも藤内へわたさず あまつさへ兼房染の染かた

くわ敷申さぬ不届物 直二なわ打てかまくら表へ召つれんとは思へ共 あす
おも知れぬ おいぼれ故 親次郎作が其代り 倅勝助 身が同道して かま
くらへつれ参る サア挨拶に及ばすは三寸なわにくゝし上ケよふか

団十

一 是侍おきやれ 其手で行よふな次郎作親子じやアない 妹小よしを人質
となし この勝助をかまくらへおびきよせよと範頼殿に頼まれて 此企の藤
内が来たと云ことは 三寸俎板見ぬいて置た 此勝助は大望の有る身の上
範頼殿へ組することはいやだ おれが幕下に範頼につけといへ

大

一 大たんふてきの其一言 推量にたがはす親次郎作もろ共に 妹小よし
を取りこになし 其方を範頼公の御身方に

加えられんとの御定 其方御かたんなすならば 直に此所に於て御大切成る
御袖判 きりんの印を渡せと有 其内意を承り 所持なしたる比企の藤内御
請致さぬは御大事助ケ置れぬ其方が命遁れぬ所じや かくご／＼

団十

一 待 藤内範頼殿より言付にて 軍勢催促のきりんの印を持参せしとか

大

一 いかにも御身方と成ならば わたせと有て きりんの印を身共が持参な
したわやい

団十

一 多年心を懸置た範頼殿の其袖判 おれに渡して早くかへれ

大

一 助ケ置れぬ勝助くわんねん

ト 抜て切付る 団十郎其刀を叩き落し置に

大七を引よせ懷より服紗二包し きりんの印を引出し

団十

一 是こそ範頼殿のきりんの印

大

一 それを

ト ひつたくつて門口へ出よふとする 此とたんに又太郎 橋懸りより出て来て 大七を引もどし みことに投ル 立廻り有て とゞ大七を切殺 手ばしこく死骸を片付て きりんの印を取上 団十郎が前へ持て来て

又

諸国の軍勢を借り集る範頼殿の御袖判 きりんの印を受取召れい

ト わたす 団十郎取て改メ 懷中して 大七が刀を取上ふり上て

切ふとする 又太郎 首さしのべて合掌する

イザ

団十

一 テモけなげ成かくこの有さま 元来そちは何物成ぞ

又

一 御尋なく共申さんと 兼而存して罷在 拙者がことは御管鎗の達人 鞠ヶ瀬秋夜が家来 増岡步藏と申物 御へんのことは及聞 ★名をなすべき天下の一人ン 折を待て主人秋夜と参会有る物ならば 誠に両勇並む物なき大丈ぶ 所持致さん其為にかく入込し拙者が身の上 蜜事もれんと思召ば すつぱりと御手にかけられ升ふ

団十 一 思ひあふたる なんじか眼中 うたがふへき所なひ
一 命は其まゝ助けくりやう

ト 刃物を投出す

又 一 忝い 然らば時せつを待て 主人秋夜と参会召さるゝ心でムルか

団十 一 聞及んだる 鞠ヶ瀬秋夜様もやあらは知る人に成ふ

又 一 エゝ忝い シテ又思ひ立れし

くわ立ハな

団十 一 是を見やれ

ト 懷より服紗ニ包みし錫壺を出して

是にて正木次友の家に伝わりし所の 南蛮流の秘法のどくやく わすれても
汲やしつらん 旅人の 高のゝ奥の玉川の水 みなもと清きかまくらの武将
頼家 実朝を初メとして用る所の此どくやく

又 一 スリヤなんばん流のどくやくを持て

団十 一 コリヤ 謀は蜜なるを持てよしとす

又 一 然らばせいうんのしむるは

団十 一 武蔵へ立こへ

又 一 鞠ヶ瀬秋夜と

団十 一 参会の砌り

又 一 まづそれ迄は

団十 一 歩蔵お行きやれ

又 一 おさらバ

ト 早三重ニ成り 又太郎いつさんに 向ふへは入ル

団十 一 きりんの印 手ニ入ルからは 弥諸国の味方を集ん此上の

けい略には此どくやくを酒にひたし試させてためしみんな 幸ひ成哉 此名酒
思ひよつたる玉川のどく酒 それ

ト 錫の壺よりとくりへ薬を入 ふり回して 元の所へ直し置く 奥
にて

一 勘 勝助殿や／＼

ト 勘左衛門出て来る

そこにゐるは勝助殿ではゐらぬか

団十

一 貴様は研屋のはゝア様か

勘

一 わしはちつとこな様に聞たいことが有て先から待て居升たわいの

団十

一 此勝助に聞たいこととは何でござんす

勘

一 外の事でもゐらぬが 此間から研て呉れるといわつしやれた其刀はどの
やふな刀でゐるやら なんとみせては下さるまひか

団十

一 成ほどわしも人に頼れた刀 こな様の所で研で貰ひとふござんす 何と急
に研れ升まいか

勘

一 サア刀によつて早速研るゝ事もゐろふ程に マアその刀を一寸見せて下
されい

団十

一 成程其刀を見せ升ふ 幸ひ／＼爰にござんす サア此刀を見て下さへ

勘

ト 一こしを勘左衛門が前へ置く 勘左衛門取上ケて

一 どれ／＼わしはとしより 殊に女 刀の目利は知らね共 地あれの疵の
こぼれのといふこと計りは見え升るわいの

鳥渡あらためて見升ふか

ト 刀を抜放している／＼に見てり惻りして

ヤ、ハ、ハ、ハ、勝助殿とし寄の目のわるいのか知らね共 是此刀にはおびた
ゞしう血ノりがしとふてゐるぞや コリヤマアどふしたのじやいのふ

団十

一 成ほど其刀はそふしたことも有る筈 去る暦々の其刀 死罪に極た物を
●されたとのことでごんした 血ノりだらけで有ふが血まぶれてあんべいが
ちつとも氣遣いな事はこんせぬ程に其刀を何と研じやア下さるまいか

勘

一 そふいふ事なら成ほど研せてしんぜ升ふ シテ此刀の銘は何といふ刀で
ゐるぞいの

団十

一 其刀の銘はしのぎ藤四郎の刀でごんす

勘

一 そんなら此刀がしのぎ藤四郎の刀でゐるかいの

団十

一 何とよい刀でこんしやうの

ト 勘左衛門 刀をさやに納 裾を引上 おびをへながら

勘

一 サア 此刀がしのぎ藤四郎の刀なら 勝助は人ごろし 注進する程にま
つて居や

ト 欠出そふとする 団十郎 勘左衛門を突のけ

団十

一 まちやれ研屋のお袋 其刀がしのぎ藤四郎の刀なら 何で此勝助を注進
するのだ

勘

一 何でとは勝助知るまひと思ふか 是／＼此書付をよんでみや

ト 懷より書付を出して

研屋中え之御触にはいつぞやかまくら乱れ橋に於て正木次友といふ人を手にかけ立退しは町人の仕わざ 其せつしのぎ藤四郎の刀 壺こしふんじつ致し候間 心当りもあらば訴出よとの御触書 また其上のせふこには 切られた人の娘 小梅殿とやらが願には 死骸の口に男の小ゆびがくひ切て有たを手懸りに 最中せんぎするとの事 差当てがてんのゆかぬ此刀 しのぎ藤四郎の刀なれば注進せねば不忠に成る 人殺の勝助待ていろ

ト 刀を持て奥へゆかふとする 奥より団蔵一こしを差て出て来て
勘衛門に太刀浴せ 手ばしかくゑぐり殺 団十郎門口を差て あた
りへ心を付る 団蔵勘衛門が死かいを片付る 相方に成る

団 一 子を見ること父にはしかずと 幼少より盛人の後はかゝる己か行跡て有ふとはにらんで置た此次郎作 正木次友を手に懸て しのぎ藤四郎の刀を奪ひ取りしとは 言語に絶せし横道物めが

団 一 ゆへ有て正木次友を手に懸けし此勝助 藤四郎の刀奪ひ取りしも 毛頭拙者か私欲にいたさん折もムらば 此刀を故次友が身寄の物共へかたきと名乗ん為計り 乍去 罪みは逃れぬ人殺 幼少の時よりけふが日迄大おんに預り升たる拙者 いつの何時御なん儀を掛ケ升まい物でも

ムらぬ此上の御願には 御勘当被成て被下升ふならば 生々世々の御厚恩と有がたふ存奉升ル

団

一 正木次友を手にかけし人殺の勝助 親へなん儀をかけまひとかんどふして呉ひとは不届ながらも氣とくな願ひ 早速聞届て久離いたすまい物でもないが 勝助そんなら己は此刀を持てかたきを名乗て打るゝ心か

団十

一 かへり打に仕る心でムル

団

一 何がなんと

団十

一 俗に申せば命がもの種 正木次友を手に懸升たれば迎 身に願ひ有此勝助 かたきと名乗て出升ル 中／＼所存はムリ升ぬ 御勘当請升れば 是より直に拙者ぎは日本六十余州をせうりうなし 武芸修行の壱人旅 あるいは野臥山に入り 剣術手練致度多年の願ひでムリ升ル

団

一 武芸修行の行脚の願ひ 留メはせね共及ばぬ願 人殺の勝助勘当すれば親子でない 他人と成て此次郎作と先つ試に立合ふて見せぬか イヤサ武芸修行に出ぬ内に此の次郎作を相手にして 立合てみる心はなひか

団十

一 其儀は元より望所 立合升ルも稽古の為 然らばお相手に相成り升ふ

団

一 おもしろい 左様に武芸執心なる倅勝助 としは寄りても吉岡兼房 相手に成て太刀筋を試ん 支度せい

団十

一 心得升た 然らば御免ん被下升ふ

団 一 早ふ／＼

団十 一 ハツ

ト 白はやしに成り 団十郎身拵へして有合ふたるきぬはりを持て出て直し置く 団蔵羽折を着たる儘にて扇をしなへのよふに直し置 双方じんしやうに立合て ヤツトこへかけ立廻りありて 団蔵団十郎が打かけたる絹ばりをあふきにて打おとす 取りに懸る所を続打にあふぎにて打すへ

団

一 ヤイ忤思ひしつたか 懸る未熟の手練にて 人もおそれず武芸修行に出んとは 片腹いたき其方が願ひ 及ぬ事じや置にせい わいらが様な太刀筋は 生兵法大疵のものと い 向後 思ひ切おろふ
サア／＼
親次郎作が盃 忤勝助壺つ吞メ かよふな時にこそ勝助 そなたに見する物有り 是／＼

ト 立て納戸の内より蒔絵の箱を取出して

是こそそなたの ちをわけし母の記念の此の一品 山吹水の簾壺流れ 家に伝る系図の一卷

ト 内より出して団十郎が前へ置き

出家と成て此二しなを母親と思ひ回向召れひ

団十

一 ヤ、ハ、ハ、ハ、山吹水の簾一流れ 家に伝る景図の一卷 此二品が何母人の御かたみとや おなつかしや／＼

ト ほろりとして思入

あら有がたや景図の一卷 山吹水の簾一流れ 今こそ

我手に入たれば　へんほんとひる返し　諸国の軍勢借り催し　簾上ヶせいて
置べきか　あら／＼／＼心よやなア

団

一　ヤ、ハ、ハ、ハ、スリヤ其景図の一卷もろ共に　山吹水の簾おしたて、
諸国の味方を集るとや

ト　とふと下において　是よりどく廻り　苦鋪こなし有て

がてんのゆかぬ親子一世のわかれと思ひ　壺つのんだるアノ酒の　五臓六腑
へ染みわたるとひとしく　にわかには五体をくるしむるは

団十

一　正木次友が家の秘法なんばん流の大どくやく　仕込みに仕込し玉川のと
く酒　目前吞れし親仁様　よも御命はムルまひ

団十

一　ハツ　おそれ入たる親仁様の御手の内　一旦思ひ立たる武芸修行の拙者が
願ひ　只この立合ひに不覺を取りしは天のいましめ　此身に受しと思ひ当り
此後武芸修行稽古の儀は相止升るてムリ升ふ

団

一　またいわれさる町人の武芸修行　悪敷道に掛ろふより　心を改メて正木
次友の菩提の為　出家と成て世を遁れい

団十

一　ハツ　出家せよとはまだしも　親の御情殺法転輪の道理を考　正木次友が
菩提の為おしからぬ命をながらへ　今より出家柴団につとめ升るでムリ升ふ

団

一　得道なしてよろこばしい　然らば出家の用意せい

団十

一　是より直に当所の菩提院へ立退　剃髪仕升るでムリ升ふ

団 一 こりや

／＼ 出家となれば死だるも同前 親子一世の此世のわかれ せめて名残りのさかづきして呉ふ

団十

一 這は立て 立はあゆめと子を思ふ 只今迄の御養育 此身に御おんを請ながら 口（ママ…只カ）一日のこう／＼もいたさず 遁世へトンセイ仕る 此身の不孝 御憤をなためられ 親子わかれの盃下されんとは有がたい 然らば頂戴仕升ふ

団蔵

一 幸ひ／＼有合せたる玉川の名酒 念仏修行にくり
そゆる 泪のつゆの数珠の玉川の此酒 サア／＼壺つの
で差升ふか

ト 団蔵 陶の酒を盃に受る 団十郎思入有て 口の内にて回向して
居る 団蔵酒を吞ほして

団

一 ヤ、ハ、ハ、ハ、ハ、 スリヤ 今吞たる酒は正木次友が家の秘法 毒薬調合
なしたる玉川のとく酒で有たか フ、ハ、ハ、ハ、ハ、 ホイ げんざいの親にど
くを吞せし倅勝助の天命知らずめ

団十

一 身に大事の有る某の身の上 まさかの時のあしてまとひ よしなき長生
召るゝ心には存すれども 大おん請し親仁様 刃物にては殺されず 毒と知
たる其酒を まいらせたるは拙者か寸志 手を手をおろさずして御命を失ひ
升る せめてこう／＼御免ん被成て下さり升せい

団

一 其だいたんな心ゆへ けふが日迄おのれが身の上 かくし包し

ことなれ共 今某が言聞さん 元来そなたは頼朝公の御種 母君はたれ有ふ
大友四郎太夫経家の娘御にて 一法師殿とは御身のことでもルわいの 成人
の後親を討べき想有りとおそれたまいて 藁の上より此兼房に預けられ 我
子となして育てしが 眼力にたがわす 飯の親たる此次郎作を どく酒をも
つて殺すとは 思へば／＼情ない サア及ぬくわだてあらんより 思ひとど
まり出家あられよ 忠儀の為に死する命は さら／＼もつておしからねど
其根生をため直し 出家させねば死ぬ／＼ エゝこなたわの／＼

ト 団蔵せりふを言ながらくるしみ 団十郎がたぶさへ取付く 髪ば
ら／＼と乱る 団蔵くるしき余り 団十郎が骸へ掴付き たん／＼
に着物破れ 白ねりに山吹水の縫ちらし はだぬきに成り 団蔵を
突のけ 団十郎ずつと立つてもがり升へ山吹水の御簾をかけ 床几
に懸り景図の一卷をひらき きつと思入 誂の相方に成る

団十

一 湯武 其主を殺して天下義を称し 衛の君 其父をころして 衛田其徳
を戴たり 我母かたは大友性井出の左大臣 橘の諸兄公より伝りし所の景図
の一卷 山吹水の御旗一流 今手に入し幸いに けふより我名を宇治民善之
助 橘の常悦と改メ大望成就のはた上せん あら／＼／＼有がたやなア

団

一 エヽ 情なひ其企て 御身の浅間敷最期の体を見んよりも 今先立つが
せめての忠義 どくでは死ぬ我最期 腹かつさばき ソレ

ト 有合たる刃物を取て腹へ突込 じり／＼引廻し くるしむこなし
有りて 臓腑を掴み出て ぶたいへ打付ると 大どろ／＼にて せ
うちう火燃る 団十郎是をきつと見て思入 団蔵はつたりとこける

ひやうしまく

天明三癸卯とし

正月吉日

桜田治助